



本学教員が関わった本

神性と経験：ディンカ人の宗教

ゴドフリー・リーンハート 著/
出口顯 監訳、坂井 信三・佐々木 重洋 訳
法政大学出版局、2019年7月

紹介者

出口 顯
(法文学部 教授)

本書の原著は1961年に出版された。著者であるリーンハート（1921-1993）は長らくオックスフォード大学で社会人類学（イギリスでは文化人類学をこう呼んだ）を講じた著名な研究者である。本書の他に著書として、すぐれた概説書として長く読まれてきた『社会人類学』（増田義郎・長島信弘訳、岩波書店、1967年）がある。

本書も、南スーダンの牧畜民ディンカの神観念や神話・儀礼を扱った民族誌として、アフリカ研究や文化人類学だけにとどまらず、哲学やギリシア古典研究でも高い評価を得ている。1966年の『アフリカ研究』2号に本書の書評を執筆した、当時東京大学大学院生だった故阿部年晴氏は、その前年に出版した『アフリカの創世神話』（紀伊國屋新書）でも、本書に登場する神話とリーンハート

の解釈を紹介しており、ディンカの世界観とその神話は日本でも文化人類学にとどまらずよく知られることになった。それゆえ『社会人類学』同様、本書ももっと早くに翻訳されてしかるべき書物であった。とはいえ、もともとリーンハートが英文学専攻だったこともあるためか、本書の英語は凝った文体で書かれた難解なもので、訳者たちは大いに苦勞したのだが、それだけに原著刊行後60年近く経っても翻訳が出なかったのは首肯できるところではある。

翻訳を思い立ったのは、『社会人類学』の訳者でリーンハートのもとで学ばれた長島信弘教授からお誘いを受け、リーンハートについて一文を書いたことがそもそもの始まりである。それがきっかけで、共訳者の方たちと2013年からリーンハートの論文や『社会人類学』の読書会を

はじめた。リーンハートは面白いということで意見が一致した三人が、ならば『神性と経験』の翻訳をという運びになった。

社会人類学の歴史は、それまでの理論や学説を批判することで新しい時代を築いてきたことの繰り返しであると、リーンハートは別のところで述べている。だとしたら60年前の本書は相当に時代遅れで訳す価値など今ではないことになってしまうのだろうか。

そうではない。よくいわれることだが古典とは、時の経過による腐蝕にも耐えてなお輝きを失わない書のことであり、また後世の研究の手がかりになる示唆や暗示がちりばめられている書のことである。その意味で本書はまさに古典である。

本書第二部の祭式の記述と解釈で著者は、神性や神霊に対して祈願を唱えること、供儀をすることが、その場で唱えられたとおりに、また供儀獣が屠られる様子とおりに経験が創り生み出されることであると述べているが、それは単なる象徴論を越えて、著者と同時代の言語哲学者であるジョン・オースティンによる行為遂行的発言の分析に通ずるものがあり、言葉と行為の理解に新たな局面を拓くものになっている。

本書のキーワードの一つがパッシオネスである。神霊に憑依され常軌を逸したり病気になった人のために、供儀が行われる例が本書で紹介されている。トランス状態になる・病気になるなど苦難を被るという受動的経験がパッシオネスである。それが供儀をするという能動的行為（アクチオネス）を生み出すことになる。しかし能動的行為は再帰的なもので当事者だけでなく集団全体をも巻き込み決して個人的なものにとどまらない。この議論は、西欧的な個の能動性を前提とせず能動の前にまず受動を想定するという点で、近年人口に膾炙するエージェンシー論やアクターネットワーク論を既に越えた洞察ともなっている。

また牛の模倣の名前にはどのようなディンカの思考の展開が見られるのかを丹念に繙いて見せた序論は、今でも余人の追随を許すところではない。

本書を監訳しながら、私は国文学者西郷信綱氏の『古事記の世界』（岩波書店、1967年）『古代人と夢』（平凡社、1972年）や大岡信氏の『うたげと孤心』（集英社、1978年）にも通じる場所が多々あるようにも思われた。その点でも本書がより多くの人に繙かれることを願っている。